

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 30 日現在

機関番号：64302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26380226

研究課題名(和文) 幕末外交儀礼の研究 欧米外交官による登城・将軍拝謁儀礼を中心として

研究課題名(英文) Diplomatic Protocol in the Bakumatsu Period, with a Focus on Western Diplomats' Audiences with the Shogun

研究代表者

佐野 真由子 (Sano, Mayuko)

国際日本文化研究センター・海外研究交流室・准教授

研究者番号：50410519

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、江戸時代最後の11年間に、徳川幕府が欧米外交官を相手とする外交儀礼の様式を整えた経過を追った。直接の成果は、従来の外交史研究、儀礼研究が見落としてきた、「幕末外交儀礼」の詳細と歴史的意義を明らかにしたことにある。そこからは、日本が朝鮮通信使の迎撃を中心としたアジア域内国際関係の伝統に立脚しながら、明治維新以前に国家間の「対等」を根本とする近代外交の本質を主体的に採り入れた過程が浮き彫りとなった。今後、この成果を近隣アジア諸国の同時代の様相と比較し、互いの連動を分析することが、19世紀における西洋と非西洋の遭遇を見直し、さらに「世界史の書き方」を捉え直すことにつながると考えている。

研究成果の概要(英文)：This research has shed light on the process that the Tokugawa bakufu established its protocols to receive Western diplomats during the last 11 years of its reign. The results have clarified concrete details and the historical significance of the "Bakumatsu diplomatic ceremonial", which was overlooked in the previous studies. From there, it has been understood that Japan, before the Meiji Restoration, proactively digested and introduced the essential part of modern diplomacy based on the concept of "equality" between the states; such efforts were rooted in Japan's own tradition of inter-Asiatic relations in which the reception of Korean envoys was core. As a next step, the research results should be compared with equivalent processes in neighbouring Asian countries, also paying attention to the interrelationships among them. This would lead to reconsidering the meaning of the encounter of the West and the non-West in the 19th century, and ultimately, the narrative of world history.

研究分野：外交史・文化交流史、文化政策

キーワード：外交 徳川幕府 朝鮮通信使 欧米外交官 儀礼 幕末 連続性 東アジア

## 1. 研究開始当初の背景

徳川政権において、将軍の居所にして政治の中枢である江戸城に、幕臣や大名らを迎え入れ、とりわけ将軍その人が彼らに謁を与えることは、最高権力者の地位と主従関係の継続を確認するきわめて重要な形式として機能した。近世の武家儀礼一般については日本史の研究者らによる厚い成果の蓄積がある。

こうした儀礼伝統の外延をなすのが、将軍の居城における類似の儀式が、この政権と他国の政権との関係を司るために行われる場合であり、江戸時代にあってはまず、徳川幕府との間で「通信」の関係が維持された、朝鮮および琉球の使節を迎接する行為が該当する。が、従来の武家儀礼研究において、国際関係とのつながりは、実質的にはほとんど意識されてこなかった。

他方、外交儀礼に関して見ると、明治以降と、近世までの朝鮮や琉球を中心とした交流を扱った研究の間で、開国から幕府倒壊に至る時期の欧米諸国を相手とする外交儀礼は、ほぼ完全に見落とされていたのである。

さて、その最初の事例として、西洋諸国からの使節として初めて江戸城に登り、徳川第13代将軍家定に謁見したのは、初代アメリカ総領事タウンゼンド・ハリスであった。安政4(1857)年10月21日のことである。この儀式の実施を決めるまでに、幕府内では1年近い議論を要したが、報告者はその論争の実質を、「幕臣筒井政憲における徳川の外

米総領事出府問題への対応を中心に」(『日本研究』第39集〔2009年〕)で明らかにしていた。そこから浮かび上がったのは、この際のハリス迎接儀礼が徳川幕府にとって、西洋国際法上の慣例に則った駐在代表による本国元首の親書捧呈から開始される外交関係の幕開けを示すと同時に、けっして経験値ゼロから始まる未曾有の事態ではなく、上にも触れた、政権内外への広がりを持つ儀礼伝統に則って構想されたという事実である。

とりわけ、ハリスを迎えるという決定に続き、その際の具体的な式次第が、長年の蓄積を持つ朝鮮通信使迎接儀礼を基礎に準備された経緯は、単に手近な前例として形式を借用したにとどまらず、政策立案者としての幕臣らが、新たな対米外交の始まりを徳川幕府の「通信」の伝統の延長線上に納得していっ

た思考の過程として、十分な注目に値する。その詳細をまとめた拙論「引き継がれた外交儀礼 朝鮮通信使から米国総領事へ」(笠谷和比古編『一八世紀日本の文化状況と国際環境』思文閣出版、2011年)がある。

その後報告者は、ハリスの登城・将軍拝謁を起点として展開する、以降数年の動きを集中的に追跡し、万延元〔1860〕年7月9日のイギリス公使オールコックの登城・拝謁をもって、「幕末外交儀礼」の態様が一通り完成を見た位置づけられることを、別の拙論「持続可能な外交をめざして——幕末期、欧米外交官の将軍拝謁儀礼をめぐる検討から」(『日本研究』第48集〔2013年〕)で明らかにしていた。

このようにして、申請者は当時、幕末期の外交儀礼を国際関係史のテーマとして正面から扱うことで、日本の幕末における対西洋外交が、いわゆる「開国」以前のアジア近隣諸国との関係とその根底において連続的に展開したことを論証しつつあった。本研究は、これをいったん完成することをめざして構想したものである。

## 2. 研究の目的

本研究は、幕末期、日本に到来し、さらに駐在するようになった欧米諸国の外交官が、徳川将軍の居城に登り、将軍に拝謁するために挙行された儀礼の詳細を紐解き、幕府においてその態様が順次、前例に依拠しつつも新規の要素を取り入れながら整えられていった経過を追跡しようとしたものである。それを通じて、条約交渉等の政治過程と並行し、絡み合いながら存在した、より文化的、象徴的な側面における徳川幕府の外交実践と認識の変遷を分析することを目的とした。

具体的には、安政4(1857)年から慶応3(1868)年の間に行われた全17例の将軍拝謁式とその連鎖関係を対象とし、明治に入り急激な西洋化を見た「ミカドの外交儀礼」以前、従来の国際関係史研究において本格的に取り上げられることのなかった「幕末の外交儀礼」について、その実態と意義を明らかにすることをめざした。

## 3. 研究の方法

本研究は、3年間にわたる個人研究として行った。

研究期間の前半においては、個々の儀礼の詳細とそれに直接かかわる背景等を、一次資料に基づいて確認することが活動の主軸であった。具体的には、『続通信全覧』（雄松堂出版）、『續徳川實紀』（吉川弘文館）を基本としつつ、国立公文書館内閣文庫蔵、東京大学史料編纂所蔵をはじめとする関係史料によって登城当日やその前後の動きを再現し、また、当日の式次第や各種の作法を定めた幕臣たちの議論の過程を確認した。同時に本研究では、外国側記録によって日本側の情報を補完し、双方からの裏づけを行うことを最も重要視したため、イギリスを中心とした現地公文書館のほか、一部の海外文書を複写版等で所蔵する横浜開港資料館等での史料収集、閲覧を集中的に行った。

以上の詳細把握を経て、本研究後半の段階においては、「開国」以前の近世における近隣アジア諸国との交際から欧米諸国との外交へ、さらに、こののち明治新政府が成立し、ほどなく機能としてはこれを引き継いでいくことになる、いわゆる「ミカドの外交儀礼」への道程において、何が連続し、何が断絶したのか、徳川幕府による外交儀礼検討の意義を明らかにするための考察に力を注いだ。

また、上述した外交儀礼の「詳細」には、式の進行プログラムである、いわゆる「式次第」のほか、参列者の顔ぶれと席次、彼らの装束、式場となる大広間を中心とした城内のしつらえ、茶菓を含む饗応、外交官の宿所から城までの行列立て、道筋、幕府側が提供する護衛の態様、城下での下乗場所といった、式の挙行にまつわる諸要素が含まれる。これらについては、たとえば服飾史、食物史といった各専門分野の先行研究を十分に参照し、本研究の文脈に取り込むことを心掛けた。

#### 4. 研究成果

既述のとおり本研究は、江戸時代最後の11年間に、徳川幕府が欧米外交官を相手とする外交儀礼の様式を整えた経過を追ったものである。そこからは、日本が明治維新以前に、国家間の「対等」と根本とする近代外交の本質を採り入れ、同時に、朝鮮通信使の迎接を中心としたアジア域内国際関係と儀礼の伝統に立脚して、それを主体的に咀嚼した過程が浮き彫りとなった。

本研究の成果は第一に、これまで外交史研

究の角度からも、儀礼研究の角度からも見落とされてきた、この「幕末外交儀礼」の詳細とその歴史的意義を明らかにしたことである。最終年度までには、ここまでの研究を総合する単著『幕末外交儀礼の研究 欧米外交官たちの将軍拝謁』（思文閣出版、後掲）を刊行するとともに、国内外（東京、京都、ゲッチンゲン、ハイデルベルク、バンコク、ロンドン、リスボン、ワルシャワ）の学会、セミナー等で成果を発表、またはその準備を行った。

ここまでの成果は、さらに今後の展開として、日本に関して詳細を探索してきたこの「幕末外交儀礼」という近代外交の端緒を、近隣アジア諸国の同時代の様相と比較し、また互いの連動を分析することにより、19世紀における西洋と非西洋の遭遇のあり方、ひいては「世界史の書き方」を大きく捉え直していく契機を孕んだものである。最終年度にはすでにその展望の具体化に着手し、近隣諸国を視野に入れた史料収集を開始した。また、そうした広範な比較研究はいずれ国際共同研究の形をとることが不可欠であり、学会等においてはそのことを視野に入れたネットワークづくりをとくに意識して臨んだ。

今後1~2年度にわたってさらに準備を積んだのち、次の段階ではこの成果を、「（日本の）幕末外交儀礼」研究から「19世紀（東）アジアにおける外交儀礼」の研究へと進展させたいと考えている。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

- 1) 佐野真由子「文化と文化の会おうところで」『京都華頂大学 華頂短期大学 学報』【査読無】通巻第20号、2016年、5-20頁

〔学会発表〕（計 11 件）

- 1) 佐野真由子「幕末外交儀礼から考える日本研究の可能性 本場に丸い地球のために」アジア日本研究ネットワーク第3回会議「日本文化の可能性」【基調講演】2017年2月18日、バンコク（タイ）
- 2) Sano Mayuko, “Diplomatic Ceremonial

in the last decade of Tokugawa shogunate (1857-1867): Japan's first step into the international society”, Joint East Asian Studies Conference 2016【審査有】 2016年9月8日、ロンドン（イギリス）

- 3) Sano Mayuko “Diplomatic Ceremonial of the Tokugawa Shōgunate”, ハイデルベルク大学 Cluster of Excellence “Asia and Europe in a Global Context” 主催 国際シンポジウム *Global History and the Meiji Restoration* 2015年7月4日、ハイデルベルク(ドイツ)

〔図書〕(計 3 件)

- 1) 佐野真由子 『幕末外交儀礼の研究 欧米外交官たちの将軍拝謁』 思文閣出版、2016年、計432頁
- 2) 笠谷和比古他 『徳川社会と日本の近代化』 思文閣出版、2015年（内「幕末最終章の外交儀礼」647-679頁）

〔その他〕

1) 新聞報道

書評「『幕末外交儀礼の研究』佐野真由子著」 『読売新聞』 2016年10月30日（評者・奈良岡聡智）

研究紹介「日本の近代外交 礎は幕末 佐野真由子 日文研准教授」 『読売新聞』 2015年7月13日夕刊

2) 関連イベント

明倫茶会「将軍慶喜と外交官たちのデザート」 席主、2017年5月28日、京都芸術センター、京都府京都市

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐野真由子 (Sano Mayuko)

国際日本文化研究センター・海外研究交流室・准教授

研究者番号： 50410519